



## 第42回

日本車いすテニス界の道をつかった開拓人生

# 大前千代子

ohmae chiyoko

20代ではアーチェリーと陸上競技で金メダルと銅メダルを獲得、40代では車いすテニスで複数大会ベスト4入り。型破りともいえるパラリンピック出場歴を持つ大前千代子さんが、今回のゲストだ。

国枝慎吾選手ら世界トップ選手を擁し、日本の障害者スポーツのなかでも強い存在感を放つ日本車いすテニス界。協会会長としてその先頭に立つ大前さんは現在、競技の新境地を開拓し続ける毎日だが、その前半生もなるほど好奇心と開拓の意気に満ちたものだった。

生後1年半でポリオによって下半身の自由を制限されながらも、さまざまなハードルを越え、やりたいことを実現してきたパワーは、今後も日本車いすテニス界の発展には欠かせない。

そんな大前さんに、これまでの人生におけるさまざまな競技との関わり、そして日本車いすテニス界が現在必要としているもの、未来に向けて実現していきたいことなどについて伺った。

聞き手／山本浩 文／高橋玲美 構成／フォート・キシモト 写真／大前千代子、フォート・キシモト

## 活発で負けず嫌い 養護学校ではガキ大将

—— 昔に比べて、ちまたでテニスの話題が格段に増えています。日本の車いすテニスプレーヤーも世界で目立つ存在です。現在お忙しいのでは？

はい。大会運営の活動などで、相当忙しいです。国枝慎吾選手や上地結衣選手がクローズアップされていることもあり、東京ではジュニアの選手も増えてきていますね。

—— 呉<sup>くれ</sup>でお生まれになって。

ええ、3歳まで過ごしました。そのあと大阪へ移ったのですが、小学3年生のときからは毎年夏休みにおばあちゃんに会いに帰っていました。自立心を養うために1人で帰れと親に言われて、最初の年は片道6時間の汽車の旅を半分泣き顔でやり通しましたね。

—— では、呉には懐かしい思い出がありますか？

朝から晩まで一日じゅう海に浸かっていました。潮がひいたら貝を拾って、湯がいてもらって食べたりとかもしました。

—— 体が悪くなったのはいつですか？

生後1年半でポリオにかかりました。

—— では広島に帰るときも車いすで？

いえ、そのころは多少不安定でしたがまだ歩けたので。松葉杖は高校生くらいのときからです。補装具はその少し前からつけていました。

—— どんな女の子でしたか？

一人っ子で、わがままだったと思います。養護学校でも、どちらかというといじめっ子で。それもあって、親が「これはなんとかせなあかん」ということで、1人で呉に行っていってというのもありました(笑)

—— 体を動かすことは好きだったのですね。

養護学校ではどんなことをしましたか？

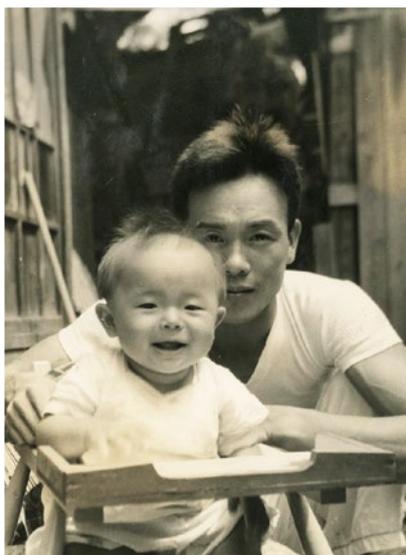
卓球とかですね。体が不自由な子どものために、それなりに工夫されたスポーツがあって、それをみんなで作ったりもしていました。

—— 負けず嫌いでしたか？

はい(笑)

—— 相当気合いの入った負けず嫌い？

負けたらもうね、「明日見とれよ」と。そんな感じでみんなと楽しくやっていました。



1956年 父(31歳)、千代子(生後8ヵ月)



子供のころ、狭山遊園地に遠足(前列左から2人目)



1975年 社会福祉研究会会宿

## 障害のコンプレックスを ふっしょく 払拭できた大学生活

—— 養護学校から、<sup>ぶっきょう</sup>佛教大学に入ったのはなぜですか？

時代だと思いますが、父親から「足が悪いんやから、自分で生きていけるだけの力をつけとけよ」と子どものころから耳にたこができるくらいずっと聞かされていました。女性が自立できる職業、管理栄養士になろうと思ったのですが、実験があるから危険だと言われて入れてもらえなくて、じゃ自分は障害があるから福祉系かと、佛教大学に。

—— 大学では松葉杖生活ですね。生活の中で克服しなければならぬ問題はいろいろあったかと思いますが？

大学に通うにあたって、まず親元から離れて下宿したかったのですが、一人暮らしの障害者に貸せる下宿はないという時代だったので探すのに苦労しました。最後に見つかったのが、寺を下宿にしたところでした。女子が10人いたんですけど、寮監さんが障害があるからといって、特別扱いをしないでくれたのが私はすごく嬉しかったですね。大学も、養護学校と違って階段もあるし、移動が大変だったのですが、しんどさにもだんだん慣れて。

—— 学業以外にはどういった活動をされていましたか？

キャンプリーダーをやっていました。京都市障害児福祉協会が実施していた、京都府の障害児が対象の療育キャンプの運営です。毎年、夏休みの2ヵ月間ずっとキャンプ場で過ごしました。最初は障害のある自分が障害児をみてもいいのか、他の大学生たちと同じように行動できるのかとか色々な葛藤もありましたが、自分がどれだけがんばれるかを試してみたい気持ちもあって。そしたら結構同じようにできた。周りのリーダー仲間も「足が悪いだけやん」って言ってくれたりもしたし、自分のほうが精神的に強かったりする部分もあったので、これらの経験を通して健常者に対す

るコンプレックスも払拭できました。

—— 大学のクラブには入っていなかったのですか？

社会福祉研究会に入っていました。

—— これはまずずいぶんと硬いですね。やはりいずれその道に進もうと思って？

はい。障害児の施設に入ろうと思っていたのですが、実習などで体験してみると、現実的に自分には抱きかかえなどが大変で、将来的な職業にするのは難しいなど。

—— それで、卒業後の進路は？

全然畑違いの金融関係に行ってしまいました。障害者ががんばっている姿を見せるのも私の福祉かな、と自分で勝手に理由をつけて(笑)

## アーチェリー開始半年で 「パラリンピック目指さへんか」

—— アーチェリーに出会ったのはどんないきさつですか？

やはりそれまでずっとキャンプなどで体を動かしてきたのでデスクワークはちょっと物足りなくて、仕事にちょっと慣れたら何かを始めようと思っていました。通勤途中に長居障害者スポーツセンターがあったので寄ってみたのが始まりです。アーチェリーと水泳と卓球があったのですが、あんまり人がしてないアーチェリーをやってみよう。

—— 始めた当時の記憶はどうでした？

やっぱり最初は弓をひくのも大変です。でもずっと松葉杖で歩いているので、肩とか腕は丈夫で、



1978年 長居障害者スポーツセンターでのアーチェリー練習(中央)



1980年 アーネムパラリンピックアーチェリー会場にて

強めの弓もひけたし遠くに飛ばせたので有利だったと思います。始めて半年くらいしてから「パラリンピック目指さへんか？」と。

—— 筋があると見られたってことですね。そう言われていかがでしたか？

最初はパラリンピックって何かな？という感じでしたね。パラリンピックに出る前に全国身体障害者スポーツ大会に出たのですが、入場行進で皇太子さまをはじめ、大勢の人たちの前を行進したときには感動しました。それよりもっと世界的な大会に出られるというのは嬉しかったですね。

—— 練習はどれくらいしていたのですか？

練習は仕事帰りにはほぼ毎日、夕方6時から9時くらいまで。土日も通っていました。

—— アーチェリーの面白さはどんどんわかってきたんですね。

ええ。的に当たり出したら面白かったですね。

—— パラリンピックが決まって、トレーニングはそれまで以上に？

はい、センターでつくってもらった筋トレのメニューを家でもこなしました。



1980年 アーネムパラリンピック・60mダッシュ(左)



1980年 アーネムパラリンピック・開会式入場行進(2列目左端)

—— 世界の情報などは入ってきてましたか？

いや、まったくわからなかったです。自分の持っているものを出そう、それだけでした。

## 外国人選手に気おされながら初のパラリンピックで金

—— パラリンピックに出場してみて、感触はどうでしたか？

すごく緊張したというのが記憶に残ってますね。初めてなので、相手が外国人というだけでビビってしまうというか。

—— 初めての国際大会がパラリンピックでしたか？

そうです、他の人もコーチもみんなそんな感じでした。役員も入れて80名くらいの家族みたいなチームでした。

—— 出た種目は？

陸上競技のスラローム、60mダッシュ、アーチェリー、ダーチェリーの4種目に出ました。もちろんアーチェリーがメインです。スラロームは日本人が強い種目だから絶対メダル獲らなあかんと言われて、それもプレッシャーになりましたね。車いすも全部借りもので、発泡スチロールの板などで足置きの高さを調整して出たんです。

—— それでアーチェリーで金、スラロームで銅。見事ですね。スラロームは練習していたんですか？

長居障害者スポーツセンターの休館日に毎週毎週コースを作ってもらい猛特訓しました。

—— ダーチェリーというのは？

アーチェリーの矢を使って、ダーツをするんです。

—— メダルを獲った感想はいかがでしたか？

信じられなかったです。帰ってきたらいきなりテレビ局とかも来ていてびっくりしました。

—— 24歳での出場でしたが、そのあともパラリンピックを目標にしていこうといったような……。

それはなかったです。次の年に結婚が決まっていたこともあり、これで終わりかなと思っていました。



1980年 アーネムパラリンピックメダル

## 結婚・出産後、黎明期<sup>れいめいき</sup>の 車いすテニスに出会う

—— ご結婚後、テニスの種目で復帰されました。どういった経緯でしょうか？

日常生活のなかで、主婦になっても母親になっても自分が自分としてがんばれるものをひとつ持っておきたいと思っていました。車いすテニスというスポーツが日本に入ってきたと聞いて、友だちと泉ヶ丘のテニスクラブに見学に行きました。ラリーがすごくかっこよくて、やってみたいと思いました。人がやっていることだから自分も絶対できるなと。

—— 結婚されてからしばらくは運動そのものをお辞めになっていたのですか？アーチェリーの弓も何もかも置いてしまっただけ？

はい。何もやっていませんでした。

—— で、テニスを始められた。おいくつくらいのことですか？

30歳くらいのときですね。始めるにもまず車いすをつくらなあかんってことになるんですけど、どんな車いすをつくれればいいのか業者もわからないし、とりあえず普段用の車いすにちょっと角度をつけたような車いすをつくりました。でき上がるのに3~4ヵ月かかりました。当時は、コートに車いすが入ることがままならない。月に2回、民間テニスコートのオーナーさんが好意でコートを使わせて下さいましたが、もっともっと練習したいと思うのは人情です。ほうぼう探すんですけど、車いすでテニスなんかできるわけないやろとか、ボランティアの方を連れてきてくださいとか、ハードコートが傷むから入れへんとか、いろいろ言われるわけです。けんかもよくなりましたね。そんななか、23年前になりますが、堺市の臨海テニスコートに新しいコートをつくるから車いすの人も見に来てほしいという話があって、間口を広げるとか、自動ドアにしてほしいとか、車いす用のトイレもつくってほしいといった要望を聞いてもらえたんです。それで、すごく使いやすいテニスコートができました。その後大阪の選手が強くなっていったのは、このテニスコートのお陰でもあるんです。



2002年 神戸オープン

—— テニスとアーチェリーの違いはどう感じましたか？

テニスはやっぱり動くスポーツなのですごく魅力的でした。あと、太陽の下でスコートをはいて、足を出して運動するってすごく気持ちいいじゃないですか。それで、私たちのダブルスが初めて試合でスコートをはきました。それまではみんな足を隠してやってたんです。やっぱり障害があると、足の太さとかも違いますし、普段出していないから足も真っ白で、やはり恥ずかしいです。でも私たちが足を出すようになってから、ぼつぼつと出す人が増えていって、今ではみんな足を出しています。

—— 最初にやるのは勇気が要ったんじゃないですか？

要りましたね。見苦しかったかもしれないですが、気持ちよかったです(笑)

—— 環境が変わってテニスの回数も増えましたか？

ほぼ毎日になりましたね。子どもは幼稚園に、それ以外は両親に預けたり……。

—— どっかにやっついて？(笑)

で、子どもが帰ってくるまでに自分も家に帰っておくと(笑)



## 車いすテニスの発展とともに ランキングトップに上りつめる

車いすテニスの大会は、まずはニューミックスという、健全者と車いすプレーヤーがダブルスを組む大会から始まってます。当初は車いすテニスの技術が未熟で、当然チェアワークも知らないの、少ししか動けない状態なんです。それを健全者の人がカバーしてくれて競技が成立してました。で、何年か経って車いすのレベルが上がると、車いすが独立してシングルス、ダブルスができていくという流れでした。大阪でも、ニューミックスの大会が始まりました。

—— そのころ、大阪にもう組織はあったんですか？  
私がテニスを始めて間もなく大阪車いすテニスクラブができました。大阪の実力は全国でもトップでしたね。そのうち全日本のランキング制が始まると、みんなさらにがんばりましたね。

—— 大前さんはランキングではどのあたりにいらっしゃいましたか？  
始めて6、7年でトップにいきましたね。神奈川に1人とても強い人がいて、その人に勝ちたい一心で努力して。

—— 大前さんは苦手なところを克服したいタイプか、それともよいところを伸ばしたいタイプでしょうか？  
苦手を克服したいタイプですね。

—— では穴のない選手を目指していたのですね。トレーニングは相当な量だった？  
家のこともしなければいけないので時間が限られてましたけど、その分集中してやれたのがよかったと思います。

—— たとえば具体的には？  
イメージトレーニングです。

—— たとえばバックハンドだったら、バックハンドで成功する自分を思い描くみたいな？  
そうですね。あとは家でチューブを使って筋トレをしたりとか。

## 1990年代前半の海外と 日本とのレベルの差

—— テニスで初めての国際大会というと？

93年に初めて、ワールドチームカップの日本代表になりました。全国のランキング上位だけが行く大会で、男子2人女子2人の選手編成でオーストリアに行きました。

—— いわゆるネーションズカップですね。成績は？  
3回戦負けくらいかな……。相手はオーストラリアやったと思います。

—— そのときの海外の選手達の印象は？

まだ、海外の選手というだけで日本人選手は小さく感じていました。そのころ国内では外国人の出場する大会はめったになかったのね。ただ、1回2回って回数を重ねると、あの人たちだって人間やし私達と一緒にやん、みたいな感じにはなっていましたね。

—— サポートスタッフの体制は当時どんな感じでしたか？

当時はコーチ、監督含めて2名。選手もスタッフも、みんな初めてでした。

—— 海外でプレーしてみて、日本と海外の違いみたいなものは感じましたか？

動きも違うし、他の国の選手の研究もできてないし、どんなことから始めればいいのかコーチも選手もわかっていないような状態でした。大会に出たときに「ああやった、こうやった」と反省して積み重ねていくみたいな。今なんかは国枝選手が世界のトップにいますが、当時の日本人はそんなことは考えられないレベルでした。

—— 当時の金銭的な負担は？

全部自己負担でした。コーチも監督も。代表に選ばれて自己負担って変な感じやなあと思いつつ、めったにできない経験なので自費で行くっていう選手がほとんどでした。



—— そのころの車いすの性能はどうか？  
 当時は3輪だったんです。今の競技用車いすは接地箇所が5点あるんですね、前に小さいキャスターがあって、左右に大きい車輪があって、さらに後ろにひとつ。でも当時は左右の他に前に長めの車輪がひとつだけ。ちょっと上体を後ろにそらすとすぐ倒れてしまうんです。体の中心を動かさないので、腕だけのテニスでした。ただ回転はとてもしやすかったです。それから後ろに転倒防止用車輪がつき、シドニーパラリンピックのころは4輪に、そして5輪になり上体を使うテニスに変わっていきました。

## 40歳でパラリンピックの舞台に復帰

—— そして40歳でパラリンピック。日本からは何人で臨みましたか？

男女2人ずつ、ダブルスとシングルの両方で出場しました。

—— トレーニングの内容は変わってきましたか？

95年から週に1、2回、和歌山県のコーチの指導を受けるようになり、アドバイスがもらえるのでどんどん成績も上がっていきました。

—— 40歳といえば、健常者のトップアスリートでいうとピークは過ぎたころの年齢ということになりますが、障害者スポーツは結構寿命が長いんですね。そのころもどんどん上達した？

はい、そう感じました。食べ物に気をつけ、それなりのトレーニングもしていましたし。

—— ご家族もそんなお母さんのがんばりを知っていて、協力してくれた？

そうですね。ずっとテニスをやっていた息子が大学生になるとコーチのバイトをしまして、私にアドバイスをくれたりするように。経験をさせる意味で、バイトでお金を貯めさせて海外遠征に連れて行ったりもしました。そして現地で息子は男子外

国人選手のヒッティングパートナー（練習相手）をさせてもらったりしました。

—— どのくらいの頻度で海外遠征をされていたんですか？

2000年ごろには年に3ヵ月くらい海外遠征をしていましたね。一度のトーナメントに1週間くらい、それをいくつも転戦するので、一度行くと2～3週間帰ってこなかったです。で、帰ってきたら次の週からまたどこかに行くとかですね。

—— 海外遠征を重ねて、何か自分のなかで変化などがありましたか？

やはり強くなったと思います。精神的にも。そのころの日本の障害者は1人で海外に行く人は少なかったですね。なのでよく空港でもめてました。日常用の車いすも、重量制限でお金をとられそうになるんですね。でもこれは私の足、体の一部、それでお金とるのはおかしくないかと。出国時はい

つもそれでまずもめるんです。海外ではそういったのもめ事は何もなかったですね。そういった意味では、パラリンピックは他のトーナメントに比べると楽でした。

—— というと？

個人で行くトーナメントは何人も全部1人でしなきゃいけないからすごくエネルギーが要るんですよ。言葉

の壁から始まり、先方の送迎が来てなかったらどうしようとか、ヒッティングパートナーを探さなきゃとか。その意味では、いろいろお膳立てしてくれるパラリンピックやワールドチームカップはすごく楽でした。

—— 世界マスターズにも出場しました。

パラリンピックに出るより嬉しかったです。世界のトップ8しか出ない大会なので、自分がスター扱いされるんですよ。ホテルもそれなりのホテルで、毎日プレゼントを置かれたりとか。そういう居心地のよさを体験すると、また来年もここに来ようとなるわけです。またトップ8は、健常者の大会である全豪クラシック8にも出られるのがすごく嬉しかったです。



1996年 アトランタパラリンピック (前列右)



2000年 シドニーパラリンピック (前列右)

## 現役プレーヤーから、組織でプレーヤーを支える身へ

——世界の檜舞台の一番光が強く当たっているところを経験してきたわけですね。一方で、組織に関わるようになったのはいつからですか？

4年くらい前からです。北京パラリンピックの代表選考大会の年に左腕の腱を切ってしまい、どうか代表は維持できたんですが、もう自分はこの大会までにしようと思いましたが、国内のトーナメントには出ていましたが、パラリンピックにはもう出ないと決めているし、身が入らない。そんなころに日本車いすテニス協会会長の話がきたんです。今まで自分ががんばってこられた恩返しの意味で、引き受けようと思いました。

——会長になったときの組織の状態は？

まだちゃんと構築できていないような段階で引き受けたもんですから、大変でしたね。

——人事問題、お金の問題、他との連携の問題、いろんな問題があったかと思いますが。

はい。人事もみんな携わりたがらなくて限られた人でやっていたし、お金もないし、できることもできない。周りからは、協会はなんもやってくれないみたいな声も聞こえてくるし(笑)

——会長として、何から手をつけましたか？

吉田記念テニス研修センター(TTC)で大会を開催してるんですけど、まずはそれを成功させないといけない。観客を集めなきゃいけない。



2004年 アテネパラリンピック(前列左から2人目)



2008年 北京パラリンピック(右)

——トーナメントを活性化することで組織が強くなることを経験上ご存知だったんですか？

そうなると思うんです。大会をもっと盛り上げて、世間に知ってもらいたい。もっとメディアなどでも取り上げてもらえたら活気づくと思います。

——現役を退いたあと、指導者という選択肢はなかったのですか？

そういう話もあったんですけど、ちょっと私には無理やと思って辞退しました。選手として遠征に回っているころ、自分の後輩達にいろいろ言ったものんですけど、「そんな無理やわー」で終わらせてしまったりして……。コーチにでもなったら、ムキになってしまうと思うんです。

——選手からいきなり組織運営というのは難しいといろいろなところで聞きますが？

難しいです。すぐ選手の立場で考えてしまうんですけど、お金のことなんかスバツと切らなければならないところは切らないといけないので。ごめんやでって言って(笑)

——当面の課題は？

企業さんにもっとPRして、協会を協賛してもらえるようになるといいなと思います。そこが今、全然できてないところですね。海外の人たちはそのへんうまいですね。現役最後のほうに南アフリカのトーナメントに参加したんですけど、最初は選手自身の車いすも足りていなかったし、トーナメントとしても全然うまく回ってなかったのに、2年後にはスポンサーもついて、すごくよくなっていました。まだまだ勉強不足ですが、今年4月に一般社団法人になったところなのでこれからだと思っています。

## 現在の日本の車いすテニス 強みと課題

—— 一方で国枝選手など、世界を引っばる選手が日本から生まれてきているわけですよね。何がこういった才能を開かせているのですか？

それはやっぱり環境だと思います。国枝選手は小学校のころから知ってますけど、TTCの理事長の理解があり、職員である丸山コーチが個人コーチとして国枝選手の海外遠征に帯同できたことで、丸山コーチも海外の研究ができ、そのフィードバックに国枝選手が応えるというのが非常にうまくいった。上地選手もコーチとの巡り合わせによって伸びました。この2人に限らず多くの選手が育っていますが、車いすテニスに携わってくださる人が徐々に増えてきています。

—— 他にやるべきことは？

若手選手をどうやって伸ばしていくかですかね。

—— 日本の障害者スポーツの状況を見ると、障害があるということで家庭からなかなか出てこないという問題があるようです。現在車いすテニスには非常に強いスポットライトが当たっていますので、そういった子ども達をひっぱり出すのに大きな力を発揮しそうですが？

小さいうちは親御さんの理解がまず必要ですけど、続けられたら、自立心が養えますね。自分の経験上、いろんな可能性を見出せる気がするんですね。

—— アメリカのある大学では、学校に10台車いすが置いてあって、健常者も当たり前のように車いすテニスを体験できる。日本の学校体育でも車いすテニスを普通にできるような環境が整うといいですね。

そうですね。個人では車いすがなかなか手に入らないので、車いすが学校に何台かあると一番いいと思いますね。

—— 現在世界のトップレベルにきている日本の車いすテニスを支える、日本製の車いすの性能の高さについてはいかがですか？

車いすの性能は昔はアメリカが一番で、日本人選手のほとんどが外車でしたが、今では日本製はとてよくなりました。

—— 研究部門と実際に使う部門、開発する部門との連携はいかがですか？

メーカーとの連携は進んでいると思います。大学の先生から研究開発のお話もあって嬉しいですけど、乗りこなすのにも時間がかかるので、東京パラリンピックの5年前になって言われてもなあ、という感じはあります。

## 2020年とその先へ 車いすテニスの展望

—— 2020年に向けた構想や計画について、普及、成績、世の中の関心といったことも含めて教えてください。

まずはメダルを獲得できるように可能性のある選手の強化、そして次に続く選手の強化育成と普及ですね。障害があってもいろんなことができることをスポーツを通して見てもらいたい。

—— 2020年のずっと先の映像も浮かんでいるという感じですか？

自分の経験上、スポーツは人生を豊かにすると思うんです。東京オリンピック・パラリンピックを機に、障害があってもなくても、誰でも簡単にスポーツを体験できる環境が整えばいいなと思います。

—— 指導者の育成については？

今、コーチとかトレーナーの育成に関しては、年に



2001年 大阪パラリンピック招致活動(中央、モスクワにて)

1回くらい講習会を開いています。

—— 障害者を見るスポーツクターやトレーナーなども今後もっと増えていかないといけないですね。その辺も注文はつけていますか？ 協会のほうでもトレーナーの数は増やしています。ただ選手のリクエストに合致させるのが難しいですね。

—— 横の連携というのはどうですか？ たとえば車いすバスケットなど、他の障害者スポーツ組織との連携など。なかなかないですね。情報交換まではしていませんね。

—— 平成23年にスポーツ基本法ができて、障害者スポーツの位置づけが明記されましたが、それを受けて変化は感じますか？ そうですね……。上から降りてくる強化費が増えるかなとは思っています。

—— 2020年に向かって国の支援も広がってきていますね。そして2020年以降のことも考えて経営していかなければなりませんね。2020年以降助成金が少なくなってしまうんじゃないかという懸念はあります。そして、お金をいただけただけとして、それを使いたいところで使わせてもらいたいですね。

—— 障害者スポーツのナショナルトレーニングセンター構想も進んでいます、期待されることいろいろあるのではないですか？ なかなか思うように使えないようなので、練習の拠点は変えたいと思っています。

—— 具体的にはどのへんに？ 現在拠点となっているTTCがやっぱり一番かなと思っています。

—— 文部科学省に障害者スポーツが移ったことによる変化は感じていますか？ うーん、まだ感じてないですね。

—— 注文することがあるとすれば？



2008年 北京パラリンピックで国枝選手と



2001年 カナダ・カナディアンオープン優勝(前列左)

やっぱり予算ですかね。予算を使える枠が決まっているので、もっと使える枠を多様化して欲しい。たとえば、現在行われている国際車いすテニストーナメント7大会の大会運営費などに使える、などですね。どの大会もお金の工面に苦労していますから。

—— 現在もっとも感じている海外と日本との違いは何ですか？ 指導者不足ですね。海外のコーチとは全然、数が違うような気がします。

—— それはテニス協会だけで解決できそうなものですか？ これまで携わっていただいたボランティアのコーチが中心になっていて、なかなかそこから広がっていかないというのはありますが、誰も彼もとはいかないので、人選は難しいです。

—— 今年はスポーツ庁発足の年でもあるんですが、何か注文をつけるとすると？ 障害のある人がスポーツを始めようとしてもなかなか難しいところあります。たとえば、一般の人はテニスシューズを履けばコートでテニスができますが、車いすテニスは車いすがなければ体験もできない。どこのテニスクラブに行っても車いすが当たり前置いてあって、特別なことではなく、普通にレッスンが受けられる。そんな風になっていけばいいですね。

—— 日本が車いすテニス天国になるといいですね。ご活躍を期待しております。ありがとうございました。

大前千代子氏 略歴

世相

1945 第二次世界大戦が終戦  
 1947 日本国憲法が施行  
 1950 朝鮮戦争が勃発  
 1951 安全保障条約を締結  
 1955 日本の高度経済成長の開始

1956 大前千代子氏、広島県に生まれる  
 1957 大前千代子氏、生後一歳半でポリオ(両下肢弛緩性麻痺)にかかる

1964 東海道新幹線が開業

1966 第2回全国身体障害者スポーツ大会(大分県)にて、アーチェリー競技が導入される

1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸  
 1973 オイルショックが始まる

1976 ブラッド・パークス(米)が、リハビリを目的に車いすテニスを始める

1976 ロッキード事件が表面化  
 1978 日中平和友好条約を調印

1980 大前千代子氏、アーネムパラリンピック出場  
 アーチェリーで金メダル、陸上競技で銅メダルを獲得

1982 東北、上越新幹線が開業

1983 日本でも車いすテニスが行われるようになる

1986 日本車いすテニス連絡協議会発足

1987 日本車いすテニス連絡協議会、日本身体障害者スポーツ協会種目別団体に加盟  
 1987 大前千代子氏、31歳で車いすテニスに転向

1988 国際車いすテニス連盟(IWTF)設立  
 日本車いすテニス連絡協議会、ランキング方式導入のために日本テニスプレーヤーズ協会に改組  
 日本車いすテニス連絡協議会、国際車いすテニス連盟に加盟

1989 日本車いすテニス協会(JWTA)設立

1994 大前千代子氏、飯塚国際車いすテニス大会にて優勝

1995 阪神・淡路大震災が発生

1996 アトランタパラリンピック開催  
 1996 大前千代子氏、アトランタパラリンピック出場  
 車いすテニスに転向し、初のパラリンピックとなる

1997 香港が中国に返還される

1998 国際車いすテニス連盟(IWTF)、国際テニス連盟(ITF)に統合される  
 1998 大前千代子氏、NEC Wheelchair Tennis Masters出場

2000 シドニーパラリンピック開催  
 2000 大前千代子氏、シドニーパラリンピック出場  
 車いすテニス・ダブルスで4位となる

2001 大前千代子氏、NEC Wheelchair Tennis Masters出場  
 Canadian Openにて優勝

2002 大前千代子氏、NEC Wheelchair Tennis Masters出場  
 Canadian Openにて優勝  
 Wheelchair Classic8's at the Australian Open出場

2003 大前千代子氏、NEC Wheelchair Tennis Masters出場  
 Canadian Openにて優勝  
 Wheelchair Classic8's at the Australian Open出場

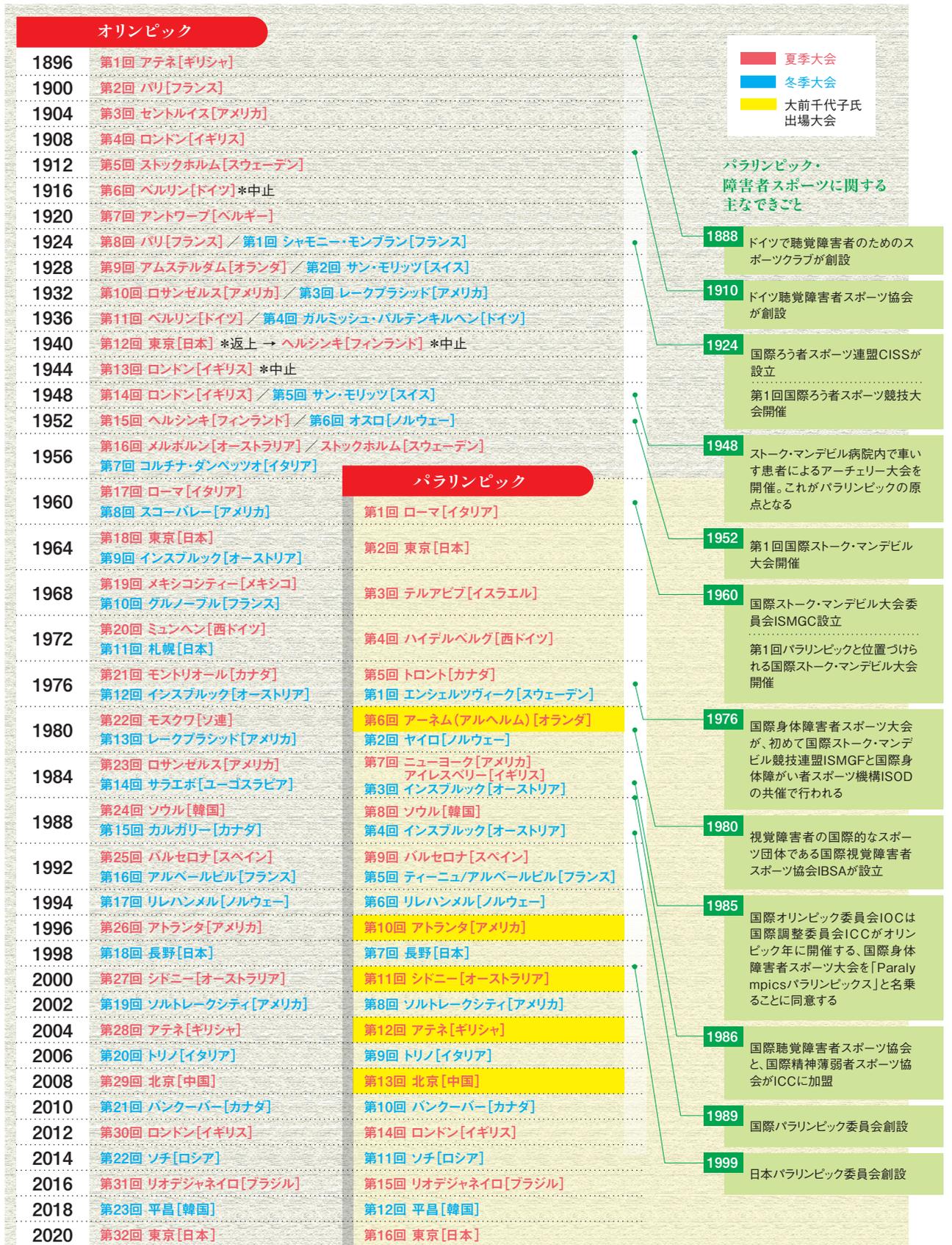
2004 アテネパラリンピック開催  
 2004 大前千代子氏、Wheelchair Classic8's at the Australian Open出場  
 大前千代子氏、アテネパラリンピック出場  
 車いすテニス・ダブルスで4位となる

2008 北京パラリンピック開催  
 2008 大前千代子氏、北京パラリンピック出場  
 2008 リーマンショックが起こる

2011 大前千代子氏、日本車いすテニス協会会長に就任  
 2011 東日本大震災が発生

2014 日本車いすテニス協会、一般社団法人として法人格を取得

オリンピック・パラリンピック年表





1956年 父(31歳)、千代子(生後8ヵ月)



子供のころ、狭山遊園地に遠足(前列左から2人目)



1975年 社会福祉研究会合宿



1980年 アーネムパラリンピック・アーチェリー会場にて



1980年 アーネムパラリンピック・60mダッシュ(左)



1978年 長居障害者スポーツセンターでのアーチェリー練習(中央)



1980年 アーネムパラリンピックメダル



1980年 アーネムパラリンピック開会式入場行進(2列目左端)



1996年 アトランタパラリンピック(前列右)



2000年 シドニーパラリンピック(前列右)



2004年 アテネパラリンピック(前列左から2人目)



2002年 神戸オープン



2008年 北京パラリンピック(右)



大前千代子



2001年 大阪パラリンピック招致活動(中央、モスクワにて)



2001年 全国選抜車いすテニス選手権優勝



2008年 北京パラリンピックで国枝選手と



2001年 カナダ・カナディアンオープン優勝(前列左)